

谷口智彦著「通貨燃ゆ一円・元・ドル・ユーロの同時代史」日経ビジネス人文庫、日本経済新聞出版社 2010 年 5 月 6 日刊を読む

ユーロの宿命—ユーロの本質はMADである—

1. 初めにユーロの本質を「MAD」であるとしてとらえておきたい。
2. MADとは冷戦下の核抑止理論、「相互確証破壊＝Mutual Assured Destruction」を指す。
3. 核ミサイルによる第一撃を被り首都機能を破壊された例えば米国は、それでも北極海深くに潜航する原子力潜水艦から発射する第二撃によって、モスクワを同様に破壊することができる。すなわち相互の破壊が確証的であることから、核は実際には使えない兵器となった。恐怖の均衡を指す状態をMADと呼んだのは、よくできたシニカルなシャレである。
4. 国際通貨ユーロについて、なにゆえ核抑止のドクトリン(教義)が当てはまるというのだろうか。
5. それはユーロに関する法体系の中に、「出口」が用意されていない事情による。
6. すなわちひとたびユーロを採用した国がどうすれば脱退できるか、明示した規定がない。同様に、追放条項もないから、好ましからざる会員を追い出す手続きも定められていない。
7. 体制選択をした場合の非可逆性——、原状復帰はあり得ないという点こそは、ユーロに関して最も注目すべき点である。平たく言えば、一度入れば永遠で、「足抜け」することを、全く想定していない制度なのである。
8. 直ちに予想される反論とは、しょせん人間がつくる制度なのだから「絶対」はあり得まい、例外などその気になればつくれるだろうというものである。
9. 理屈の上では正しいかもしれないが、それではドイツやフランスがユーロを放棄するとは、どのような状況を想定しての話だろうか。
10. 例えばドイツがユーロを放棄したがつているという噂が少しでもたつや否や、ユーロは国際通貨市場で投げ売りされ、価値を暴落させるだろう。それはすなわちドル、円の暴騰を招来するはずで、一言で言うと国際通貨システムのメルトダウンへとつながりかねない。

11. 言い換えればシステムと無理心中するのでなければ、ユーロを捨てられない。相互の完全なる破壊が確証されているわけだから、ユーロとはあたかも冷戦下のMADの如くだと言いたいわけである。
12. ユーロを放棄しギルダー、リラといった元の通貨に戻すのは、既投下資金(sunken cost)の大きさとの見合いで見てあまりにも釣り合わない事業となる。費用対効果の観点からしても、現実には取り得ない選択だろう。
13. しかしそのことが、ユーロ体制に「出口」が用意されなかったことのすべての理由なのではない。
14. 同様に、出口を持たない手続きの体系、その意味で時間の無限性を想定した体系がないか探っていくと、交戦国間で戦後に取り結ぶ平和条約がそれに当たることに想到する。
15. 平和条約にも、「出口」はない。当たり前だが、かくかくしかじかの場合において両当事国は再び交戦状態に入るということを規定した条項は、平和条約において準備されない。平和条約が破られる場合とは、平時が終わる時であり、システムが道連れにされるときである。
16. 実はこの隠喩に、ユーロの登場した事情が語り尽くされている。結論を言うならばユーロとは、ドイツとフランスを永遠に縛り付ける制度である。
17. 独仏恒久和平条約体制——。それこそがユーロが体制としてもつ最も顕著な特徴だということは、何度強調してもしすぎることはない。

<コメント>

イギリスのEU離脱が2016年6月23日の国民投票で決まった。EUの基礎となるユーロという共通の通貨とはどのようなものを理解することが、イギリスが離脱を決定したEUの基本的理解につながる。国際経済エキスパートの谷口氏の説明は、とてもわかりやすく勉強になる。

— 2016年7月1日(金) 林 明夫記 —